

---

# 叶わぬ思い、告げる言葉

U-Ton

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

叶わぬ思い、告げる言葉

### 【Nコード】

N4985H

### 【作者名】

U-Ton

### 【あらすじ】

わけがわからんとみんなが言っていると作者が自負する作品です。

## （前書き）

昔書いた物を少しアレンジして載せてみました。

・・・青い。空が・・・青いと感じる・・・。

「おい。麻奈。起きているんだろう?」

「・・・」

「全くお前と言っやつは・・・」

「・・・」

ただ私の前には・・・青い空が広がっている。  
どうしたんだろう・・・。  
さつきから眠い。

「麻奈!! 起きろ!!」

「・・・」

「ま・・・???!!!!」

「・・・!!」

「くけけけ。ついに見つけたぞ!! 覚悟しろ!!」

私の名前を呼んで起こしていた彼の動きが急に止まった。  
時間が遅くなる。

その感じを私ははじめて知った。

私の師匠。そして私の・・・初恋の人・・・。

でも、もう私にはなかった。

彼がもうその口で私の名を呼んではくれないこと。

そして、魔族に・・・私たちが敵対してきた輩に眠りの魔法をかけ  
られ・・・

殺される運命にあることに・・・  
終わった・・・

朦朧とする意識の中、私はそう思った・・・

気がつくところには闇だった。一寸先も見えないとはこのことを言うのだろう。そして、私は浮いていた。

“麻奈、よく聞け。”

頭の中で彼・・・師匠の声が響く。

師しよ・・・う・・・？死んだはずじゃ？

“戸惑っているな、麻奈。それもしようがないだろう。これを聞いていると言うことは、俺はもう死んでいるはずだからな。”

じゃあ、なんで声が聞こえるの？

それよりここはどこ？

“これは俺が死んだら自動的に流れる遺言書・・・みたいな物だ。質問にも答えてやれないし、俺も先代から聞いたことしか、知らない。”

え・・・？どういうこと？

意味わからないんですけど？

私が混乱している中師匠であつた男は坦々と告げていく。

“まず。俺がどんな仕事をやってきたかは何年も一緒に生活してその仕事を共にやってきたからわかっているはずだ。”

彼の仕事は人間界にあらわれた魔族のうち人を殺そうとする者を抑える、または還すというもの。

15歳の頃彼に恋し家族を捨ててまでついてきたのだから・・・それくらいはわかる。

“許せ、麻奈。俺はお前にひどいことをしてしまった。”

それは、そうだ。結婚する前から未亡人だなんて。責任をとって欲しい。

しかし、どうやら私の文句と彼の謝罪は関係がないようだった。彼の声は淡々と事実を述べていく。

“この仕事は昔から男、女、男、女と次いできた。”

それは、どういう意味だろうか。

私に彼の職を次げというのだろうか・・・？

ただ、彼の邪魔ばかりして一向に役に立てなかった私に・・・？

“そして、先代は先々代を愛し、先々代は先々代を愛し・・・と言う風に続いていったんだ。”

・・・はい？ちょっと待ちなさい？

それ・・・どういうこと？

“100年前俺は俺の師匠に当たる女、つまりは先代・・・いや今は先々代になるのかな、を愛し家族を捨ててまで力になろうとついていった。”

それ・・・私と同じパターン？

待って・・・ということは・・・

“死んでいく者の言葉は一生の枷になる。それが愛している者の言

葉ならば特にな・・・”

不意に頬を濡らす感覚がした。

彼は死んだ・・・それが確実になった・・・

そして、私には彼が次に言うことがわかった。

“ 俺の後を次いでくれ。そして、少しでもこの地球上に起こる苦しみを・・・救ってくれ。俺が先代から引き継いだ力を・・・与えるから。”

私はショックで何もしゃべれなかった。  
ただただ、涙で頬を濡らすだけだった。  
暗い闇に一つの白い光が灯る。

“ 麻奈、いや現代当主麻奈に先代当主である私の力の全てを与える。”

私の師匠・・・私の最愛の人の声が闇の中から聞こえた・・・  
私はなす術もなく光に包まれる。

そして力が湧き上がってくるのを感じた。  
流れる涙を手で拭い・・・そして、闇に向かって1礼をした。

“ 麻奈、愛してるよ・・・”

最後に彼はそういったような気がした。

「あゝ畜生。惚れたからって家族捨ててまでついて来るんじゃないかな。」

「はいはい。そんなこと言っている暇があったら手伝って。」

あれから100年後、魔法によって老いなくなった私は1人の少年と同居している。

そして、彼の意味を受け継いで魔族を倒している。

今私は自分の死期が近づいていることを悟っている。

私にはあの時の師匠の気持ちがよくわかると共に・・・この少年のこれからの人生に辛い、辛い足枷をはめてしまうことに・・・自己嫌悪を感じている。

でも、微かに、ほんの微かに、この青年とこの先ずっと生きていくのではないか、という希望を抱いている。

もちろん、叶わない希望であることは知っている。

でも、そう願わずにはいられないのだ。

君に出会えてよかった

あなたに出会えてよかった

幸せな時を過ごせたから

でも、私は感じてしまう

いつかは破壊されることへの不安

君と言う存在に出会えたことを後悔したくはないから

今も私はひたすら歩み続ける

それはけっしてむくわれない思い

報われてはいけない思い

だけど追いかける

命という炎が消えるまで

人は悲しみを恐れ

喜劇をこのむ

みんな生まれてきた事自体が



最大の喜劇であり  
悲劇だと言うのに

悲劇？喜劇？

なにが悲劇で何が喜劇なのであろう

悲劇だって見方を変えれば喜劇になりうる  
喜劇だって見方を変えれば悲劇になりうる

だけど私は忘れない

貴方と会い

貴方と話し

貴方と共に同じ瞬間を生きたことを

そして私は走り続ける

自分の破滅を求めて

破滅は怖い

でも、破滅はゴールだ

私たちが永遠に逃れられないゴール

だからこそ何も気にせずに突っ走れる

だってどっちに行っただてゴールにはたどり着けるんだから

だから私は最後の瞬間まで走り続けよう

そう。この身の破滅が来るまで

このバトンを次に託すまで

別れの言葉・・・辛いけども告げて旅立とう

“愛していたよ・・・”

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4985h/>

---

叶わぬ思い、告げる言葉

2010年10月28日02時58分発行